

## 令和2年度 府中市立府中第六中学校学校経営報告書

### 1 今年度の取組目標

#### (1) 教育活動の目標と方策

##### 学習指導

##### 学習指導

- ①持続可能な社会づくりの担い手として必要な自ら課題を解決する資質・能力の育成を念頭に置き、「主体的・対話的で深い学び」・「振り返りと見通し」を活用した授業を展開し、生徒の学力の向上を図る。
- ②習得・活用・探求という学びを進める上で、各教科の見方・考え方を豊かにする授業改善を図る。
- ③各調査における市、都、全国平均を超え、学年による不得意分野の克服を目指す。
- ④家庭学習の課題を出し、毎朝の学習状況の記録（学習マラソン）で学年の1／2時間以上の取り組みを70%以上にする。
- ⑤校内研修を通じ、新学習指導要領に関する研修を深め、年間3回の授業研究を行い、授業改善を促進する。
- ⑥小・中連携の日の活用と小中連携の行事の推進を行い、地域小学校と目指す生徒像①主体的に学習し、学び合う児童・生徒を共有し、「学び」の視点から9年間を見据えた小中連携一貫教育の教育活動を推進する。
- ⑦特別支援教育の理解とユニバーサルデザインの視点による授業研究をもとに、特別な支援が必要な生徒の共通理解を進め、個に応じた指導と具体的支援を行う。
- ⑧数学習熟度少人数授業、英語習熟度少人数授業、理科 TT 授業、国語 TT 授業を通じて生徒一人一人の特性を理解し、指導内容を工夫し学力向上を図る。

新学習指導要領の基本理念である持続可能な社会づくりの担い手の育成の視点で授業改善を行い、必要な自ら課題を解決する資質・能力の育成を念頭に置き、「主体的・対話的で深い学び」・「振り返りと見通し」を活用した授業を展開し、生徒の学力の向上を図ることについて、校長が講師になり校内研修会で理解を図ったが、具体的な検証はコロナ対応の授業時数確保のための研修会規模の縮小のため十分に行えなかった。特に「主体的・対話的で深い学び」の場面は感染症対策のため大きく制限された。その分「新学習指導要領と評価」については次年度に向けて研修を深めた。学力調査も中止になり資料を得ることができなかった。今年度予定してできなかったものについては次年度にできるだけ研修に盛り込んでいきたい。数学習熟度少人数授業、英語習熟度少人数授業は、引き続き有効な手段として活用していく。出された宿題は90.9%が行っていると解答しているが、家庭学習については、65.8%の肯定的評価となり、課題がある。特別支援教室拠点校として校内委員会の情報交換では支援対応策の検討場面でもかなり成果を上げることができた。小中連携についても六中学区の小学校3校と共有した課題について情報交換と次年度に向けての準備を行うことしかできなかった。

##### 生活指導・進路指導

- ①府中六中スローガン「信頼と思いやり」をもとに、他人を思いやる気持ちと自己有用感を育て、学校生活の肯定的評価90%以上を目指す。

- ②「学校いじめ防止基本方針」を元に、毎月アンケートを実施し、いじめ、問題行動の早期発見と問題の解決にあたり、いじめ・暴力への指導、並びに生徒の悩みへの対応に対する肯定的評価 90%を継続する。
- ③あいさつ・礼への意識を高め、朝会の黙礼などを奨励し、挨拶の肯定的評価 95%を目指す。
- ④毎週特別支援校内委員会を実施し、支援の方策を具体的に進めると共に、不登校対策を進める。
- ⑤進路指導部を中心に、進路指導体制の充実を図り、全校体制で適切な進路指導を推進する。
- ⑥不登校生徒への援助を丁寧に行い、保護者や外部との情報交換。連携を適切に行い、昨年度比 10%減を目指す。

「信頼と思いやり」のスローガンはコロナ禍においても定着している。学校生活の肯定的評価は周りの生徒に対して思いやりの気持ちをもって接しているという生徒は93.9%、学校生活は充実しているという生徒は90.4%であり、学校生活の肯定的評価90%を達成できた。

「学校いじめ防止基本方針」をもとに、アンケートを行うことで、いじめの早期発見など早い段階で問題を把握し対応した。いじめや暴力に対する教員の対応に対する肯定的評価は89.7%となり、継続して高い数値を達成できた。いじめや生徒指導に関する問題については早期発見早期解決を図った。

あいさつについての肯定的評価は92.5%であった。各学年での指導や、委員会や部活動を通しての指導を充実するとともに、小中連携の行動目標としての取り組みをさらに強めていく。あいさつがあふれる学校の継続に努めたい。

特別支援校内委員会では支援シートをもとにした支援、情報交換と具体的支援を行った。不登校についても家庭や関係機関との連携を深めたが、微減にとどまっている。毎年行っている校長面接ではほとんどの生徒と面接をすることはできた。不登校生徒数の昨年度比、10%減は達成できていないが、不登校の生徒保護者の不安の解消の手応えを感じている。

進路指導部の活動は5年目になり、全校で進路指導の取り組み、進路学習を進めることができた。

#### 特別活動

- ①体育的・文化的行事における生徒の主体的な活動をすすめ、行事に対する仲間との協力や積極性の肯定的な評価 90%を目指す。
- ②機会あるごとに、地域ボランティア活動に対する意識を高め、オリンピック・パラリンピック教育の視点、ラグビーワールドカップ日本大会も意識して、ボランティアへの参加意欲、生徒の延べ参加人数の生徒総数、ともに 65%を目指す。
- ③生徒会役員会を中心とし、生徒の委員会活動の活性化、充実を図り、委員会、係活動の積極性に対する肯定的評価 90%を目指す。
- ④部活動を通じて挨拶や、規範意識の向上に努めるとともに、主体的に活動を進めることで「信頼と思いやり」を育てる豊かな心の教育を進める。
- ⑤音楽の授業、朝礼、学校行事等を通じ校歌を始めとした合唱指導を充実させ、愛校心を育て自己肯定感を高める。

新型コロナウイルス拡大防止策により体育大会、合唱コンクールが中止になり、卒業式についても2年連続縮小となり十分な活動ができなかった。

地域ボランティア活動についてもほとんど行うことができなかった。

生徒会役員を中心とした委員会活動や、学級での係活動の積極性・責任感の肯定的評価に関し

では、90.6%であった。コロナ禍にあって教員生徒の創意工夫もあって生徒が自ら企画して進める主体的活動に向け生徒の意欲を高めて、より前向きな活動、新しい活動に取り組むことができた。

部活動では、大きな制限に苦しむ場面があったが、府中市教育委員会部活動基本方針をもとに活動を進め「信頼と思いやり」「あいさつ」の定着を図り、規範意識の向上に努めた。部活動への積極的な参加は84.7%であった。

「合唱」については、本校の掲げる重点の活動であるため、少しでも早く、従来の活動に戻れることを祈るばかりである。

#### 学校運営・その他

- ① 2人の主幹教諭、さらに、主任教諭を通じて組織的なOJTを進め、特に若手教員の人材育成を図り、校内の組織的運営を充実させる。
- ② 学校だよりの発行、地域や小学校への配布、毎月の学校公開の実施を通じ保護者、地域の理解を深めるとともに、保護者、地域と協働して生徒を育てる意識を高める。
- ③ 服務研修を徹底し、学期の始めや終わりと共に、朝の打ち合わせや職員連絡会などを通じ、時期を逃さず、服務の厳正について指導し、服務事故は0にする。
- ④ コミュニティ・スクール協議会を中心として、地域とともに育てる生徒の視点を重視した教育活動を展開する。
- ⑤ オリンピック・パラリンピック教育を推進し、ラグビーワールドカップ日本大会も活用し、ボランティアマインドの育成とスポーツ志向の向上に努める。
- ⑥ 副校長等校務改善支援員を活用し校務改善を図り、あらゆる面で生徒の教育活動の円滑な実施を進めるとともに働き方改革を進める。
- ⑦ タイムレコーダーを活用した勤務時間の管理を通じ、週当たりの在校時間 60 時間を超える教員ゼロを目指し、校務改善を進め、働き方改革を進める。
- ⑧ 小中連携・一貫の日を活用し、カリキュラムの工夫を進めるとともに、生活指導上の連携を進め、「六中学区の教育を語る会」を通じ、地域活動の連携を進める。

2人の主幹教諭を教務主任と2学年主任と配置した。学年主任を中心に若手の人材育成を進めた。世代交代を今後も図り、学校運営を継続的なものにしていく。組織的OJTについても若手の登用により活性化を図る。校内研修も含め、一人一人の人材育成を進める。

学校だよりの発行は予定通り行い、コロナ禍にありながら2学期に保護者への学校公開も実施し、保護者への学校の教育活動の理解を進めた。

服務については、職員連絡会、朝の打ち合わせなどの日常的に指導と服務研修で徹底を図った。

コミュニティ・スクール協議会はコロナ禍ではあるが必要なこととして授業見学、学校評価の説明を行った。

オリンピック・パラリンピック教育については、教科内で行うことしかできなかった。

副校長等校務改善支援員については、今後も人材の確保が課題である。

タイムレコーダーを活用した勤務時間の管理の導入により、在校時間の意識化は継続して図られている。今後も働き方改革を進めていきたい。さらに校務改善に努め、教職員の健康管理を進めたい。

小中連携の一環として「六中学区の教育を語る会」を開催を計画したが、これもコロナ禍で中止となってしまった。

## (2) 重点目標と方策

府中六中スローガン「信頼と思いやり」をもとに、生徒同士の信頼、生徒と教員の信頼、地域からの信頼、保護者からの信頼を醸成するとともに、あらゆる教育活動の中で他人を思いやる気持ちを育む。その「信頼と思いやり」を土台に「確かな学力と豊かな心」「健康な身体と強い意志」「前向きな姿勢と責任感」を育てる。重点目標として以下の点を上げる。

①生徒の自己肯定感の育成、自ら学習に取り組む姿勢の育成を通じた確かな学力を身につける学習指導の推進

- ・授業の「本時のねらい」と「本時のまとめ」を明示することを共通実践として、わかりやすい授業を目指す。
- ・「主体的・対話的で深い学び」・「振り返りと見通し」の活用を通して、生徒の主体的取り組みや課題解決の場面を重視した授業を展開し、研究授業で、各教科の共通課題とする。
- ・習得・活用・探求という学びの中で、各教科の見方・考え方を働かせることを意識した授業展開を工夫する。
- ・ICTやホワイトボードを効果的に活用した授業を通じ、「学びに火をつける」効果的な課題提示により生徒の意欲向上や学びの深化を図る。
- ・指導と評価の一体化を進め、意欲的に授業に取り組む生徒を育てる。
- ・学校経営支援員を活用し、数学の基礎学力の向上を図ると共に、図書室、学級文庫の充実を図り、読書に親しむ生徒を育てる。
- ・英語の少人数授業の中で、英語への苦手意識をなくし、オリンピック。パラリンピック教育を進める。

「本時のねらい」と「本時のまとめ」については、未だ定着が難しい教員が何人かいる。コロナ禍により「主体的・対話的で深い学び」の実践も滞った。ICT機器の設置に伴い、授業に活用する教員が増えた。次年度につなげたい。指導と評価の一体化については新しい評価に向けて研修を行った。学校支援員による数学のTT授業、数学、英語の習熟度少人数授業で基礎的な学習の定着を図った。放課後学習教室などもコロナ対策により行うことができなかった。図書の司書については、生徒の図書委員会の活動とともに読書に親しむ生徒を育てる活動を行った。

②学校の組織的運営と教職員の研修の充実を通じた学校経営体制の確立

- ・毎朝の主幹会・週一回の運営委員会・月一回の職員連絡会とともに学年会・分掌部会の組織的運営を図る。
- ・生活指導部会、教務部会、進路指導部会、時間割内への設定を行い、定期的に情報交換をすると共に課題解決に組織的にあたる。
- ・年間6回の研修会を実施し、特別支援教育の理解とその充実を進めると共に研修会を通じた学校経営への参画意識の向上をはかる。
- ・起案決済システムの徹底により業務の効率化を図り、組織的運営を促進する。
- ・学期始めと終わりの服務研修の充実と日常の服務に関する話を通じ、教職員の服務に関する意識の向上を図ると共に、服務事故0を達成する。
- ・副校長の下に、経営支援組織を確立し、経営支援会議を定期的に関き、組織的運営を進め、教育活動の円滑な推進を図る。
- ・副校長等校務改善支援員を活用し、教員の働き方改革を進める。

学校組織運営は学校経営方針の下、副校長、主幹教諭、主任教諭が組織を意識して教育活動を展開した。毎朝の主幹会・週一回の運営委員会・月一回の職員連絡会では、起案決済を確実に行うこ

とで、会議の効率化を図り、学校経営方針の浸透を図った。

分掌部会は時間割の中に設定し、定期的な会議の開催で事務の効率化と情報交換の徹底を行うとともに、放課後の時間の確保を図っている。

特別支援教育については、特別支援教室拠点校として通常の学級の支援の充実を図ることができた。

起案決済については、主任教諭、主幹教諭の役割を確認しながら進めた。

サービスについては、朝の打ち合わせを通じ日常的に意識させるとともに、サービス研修を通じて徹底した。

副校長校務改善等支援事業は、支援員の確保が困難である。今年度も経営支援会議も含め、機能的ではない部分もあった。

### ③学校特別支援教育、合理的配慮、不登校生徒への理解と実践

- ・週一回の特別支援校内委員会を中心に、特別な配慮を必要とする生徒について特別支援コーディネーター、養護教諭、スクールカウンセラーとともに支援の具体的方法を検討し、適切な指導を進める。
- ・特別支援教室拠点校として各中学校との連携を深め、特別支援教室での指導及び巡回指導の充実を図るとともに、研修会を通じて特別支援教育へのさらなる理解を深めると共に、ユニバーサルデザインの視点による環境整備など、具体的な、学習環境改善、授業実践を行う。
- ・各学年の不登校生徒の情報交換を進めると共に、保護者・外部機関と連携した適切な支援を行い、登校へのきっかけを見つけ、不登校の解消を図る。
- ・スーパーバイザー、巡回相談を積極的に活用し、生徒一人一人に合った支援体制を整え、適切な支援を行う。
- ・挨拶・ボランティア・合唱を通じた自己肯定感の向上とそれらを生かした魅力ある学校づくりを進める。

特別支援校内委員会を通じ生徒の情報交換、対応の協議を行った。家庭との連携、地域関係機関との連携も進め対応した。

不登校の生徒は、特別支援校内委員会と生活指導部会で情報交換し、一人一人の生徒への支援を担当を中心に行った。月一回のスクールソーシャルワーカーの校内委員会への出席依頼など、必要に応じて外部機関とも連携し、保護者への支援も行った。学年末には校長が不登校傾向生徒への面接をほぼ全員実施し次年度への意識付けを行った。

巡回相談を活用し、支援の方法を検討した。

### ④道徳授業の充実を通じた自己肯定感と豊かな心の醸成

- ・道徳授業推進教師、学年の道徳担当教員を中心に道徳授業の充実を図り、豊かな心の醸成をはかる。
- ・道徳授業を中心とした教育活動全般を通じ、自己肯定感の向上を図ると共に、愛校心を育てる。
- ・特別の教科道徳について、「考える道徳」・「議論する道徳」の授業に向けて、さらなる指導方法の工夫、改善をし、人間としての生き方について考えを深め、多様な価値観を共有できる豊かな心を持った生徒を育てる。
- ・特別な教科道徳について評価方法の共有化を図り、適切な評価を行う。

道徳推進教師と学年の道徳担当教員が年間計画をもとに、ローテーション授業を活用し道徳授業を進めた。また、評価についても昨年度の研修をもとに評価方法の共有化を図り、適切に進めることができた。道徳の内容項目を確認し、自己肯定感と豊かな心の醸成に努めた。「特別の教科 道徳」の2年目として適切な授業を展開することができた。

⑤地域、保護者との連携を通じた学校支援体制の充実

- ・生徒、教員の地域ボランティア活動への参加を通じ、地域と協働して、地域の担い手としての意識を育てるとともに、学びに向かう力・人間性の涵養を図る。
- ・「ふるさと学習」を念頭に、くらやみ祭り、どんど焼きにボランティアとして参加し、地域の歴史、伝統を学び、ふるさと府中を愛する心を育てる。
- ・コミュニティ・スクールの充実を図ると共に、地域ボランティア活動などの連携を通じ、学校への支援体制の充実を図る。
- ・「六中学区教育の日」などを通じ、小中連携・一貫の体制を強め、地域との連携を深める。

地域ボランティア活動はコロナ禍によりほとんどできなかったが、ボランティアマインドの醸成を含め、次年度以降できる範囲で以前の形に戻していきたい。  
六中学区教育の日なども同様である。